

下関唐戸地区における観光地開発の周辺地域・住民への影響

明間奈津紀

1. はじめに

1-1) 研究の背景と目的

下関市が、地域経済の活性化を狙ったハード面での観光地開発を行ってから久しい。下関市が観光都市としてその転機を迎えたのは、平成13年に行われた新水族館「海響館」オープン、新「唐戸市場」の開場である。観光産業が発達する前の下関においては、水産業、造船業などが産業の中心的役割であったが、北九州への拠点化が進むにつれ、衰退がみられるようになった。また、ウォーターフロント再開発以前の観光エリアは、赤間神宮や旧英国領事館などの歴史的遺構が中心であった(図1)。しかしこの頃の下関市は通過型観光地と呼ばれる観光客の滞在時間が短く宿泊や、飲食による観光収益の低い地であった。その状況を改善すべく、下関港唐戸地区で次々にハード面での観光地開発が行われた。平成13年には「海響館」オープン、新「唐戸市場」の開場、平成14年には「カモンワフ」がオープンした。このような大規模な開発は、その周辺地域にも大きな変化をもたらすと考えられる。例えば交通網である。駅から観光客を運ぶためのバス路線の増加や、本数の増加が考えられる。そういったハード面での影響も考えられるが、住民に関する一見目にはつかない影響も考えられる。①ハード面での開発や、観光客の増加に伴う地域の変化は、どのような影響を地域住民および周辺地域に及ぼすのだろうか、②観光施設が新しくできたことによる影響を住民はどのように受け止めているのだろうか。唐戸市場は、以前から唐戸にあった施設であるため、今回のオープンは、移転してリニューアルオープンということになる。そういった施設の場合、以前から使っていた住民は新しくできた施設を以前と比較してどのように評価しているのだろうか。本研究では、近年観

光地化した下関港唐戸地区の新たな観光施設建設による居住環境の変化、商店街への影響と地域住民の観光地化への評価、および周辺住民の観光に対する意識を調査し、観光地開発の周辺地域に及ぼす影響について考察することを目的とする。

1-2) 先行研究

再開発に伴う地域の観光地化に対する住民の意識や評価、観光開発が周辺の地域にどのような影響を及ぼすかについての研究は、これまでに多く行われてきている。高田・大西(2010)では、「観光開発による創作的景観の形成過程と地域住民評価に関する研究 中国上海市金山区中洪村における農民画を題材として観光開発を事例として」において、地域住民属性及び、観光開発による創作的景観の評価や、観光地化への賛否、地域住民の評価構造を明らかにするため、地域住民を対象としたアンケート調査を行った。折田ほか(1998)は、「過疎地域の観光開発に関する基礎的研究」において秋田県における観光開発について、市町村の観光担当部局に対してアンケートによる調査を行った。秋田県において実施されてきた施策の評価、観光開発の視点から見た道路の評価などについて分析を行っている。須藤(2007)は「関門地域研究 Vol.16『資源としてのソーシャル・キャピタル研究』」において「地域の観光化に対する住民の意識」と題し、観光地化に対する住民の意識と態度について、北九州市と下関市を対象に行っている。本稿と調査地が同じではあるが、主な対象地域は北九州市となっており、下関市も全市を対象としているため、観光地化した周辺の住民の意見というのはわかりにくい。本稿では市全体ではなく、観光開発地域とその隣接地域住民の声を調査する。



図1 対象地域概観（地理院地図より作成）

1：火の山公園，2：赤間神宮，3：旧英国領事館，4：海響館，5：唐戸市場，6：カモンワーフ

2. 対象地域概要と調査方法

2-1) 対象地域概要

本稿では、山口県下関市下関港唐戸地区周辺地域の、唐戸町、南部町、唐戸商店街を研究対象地域とした。下関市は山口県一の人口を有する市であり、本州最西端に位置する。下関港の後背地として栄えた港町である（図1）。

下関港唐戸地区では、平成13年より大規模な観光地開発が行われてきた。関門海峡が見渡せる地域であり、開発以前は、赤間神宮や、旧英国領事館など、自然風景と歴史的遺構が目立つ観光地として認識されていた。

平成13年4月にオープンした「市立ものせき水族館海響館」（以下、海響館）の前身となった水族館は以前から老朽化が問題になっていたが、平成11年の台風18号によって壊滅的被害を受け、移転・移築することとなり、下関港唐戸地区にてリニューアルオープンした。運営は、市から運営委託された公益財団法人下関海洋アカデミーが行っている。

海響館と同じく平成13年4月にオープンし

た「唐戸市場」は観光的要素を兼ね備えた水産市場である。毎週末、祝日には「活いき馬関街」というイベントを開催する、イベント時には市場でお寿司などを購入でき、その場で食べることのできるスペースもあるため観光客でにぎわう。4月、10月にはそれぞれ唐戸春・秋まつりが開催される。唐戸市場業者連合協同組合が運営を行う半官半民の施設である。

平成14年4月には、シーサイドモール「カモンワーフ」がオープンした。食事処や土産物店などが入った施設である。下関フィッシャーマンズワーフ株式会社の運営する、海沿いの3施設の中で唯一の民間運営施設である。

海沿いの観光地と国道を挟み、住宅街や商店街などがある。今回アンケート調査を行った地域は、下関港唐戸地区周辺に位置する唐戸町、南部町および唐戸商店街である（図2）。

唐戸町は人口298人、世帯数159世帯（2016.6時点）の町である（国勢調査、2015）。商店街も有している。唐戸商店街は、観光スポットである唐戸市場や海響館のすぐ北側に位置し



図2 調査地域（地理院地図より作成）

1：唐戸町，2：南部町

クセスも良好である。創立は戦後まもなくとされている。2018年2月現在、32店舗の商店が軒を連ねており、飲食店の他、歯科などの病院が目立つ。日用雑貨や美容室の店舗も多くみられることから、地元住民の生活に対応した要素の強い商店街と言える（唐戸商店街 HP）。南部町は人口901人、世帯数480世帯（2016.6時点）の町である（統計局，2015）。どちらの町も海沿いの観光地へは道路を一本わたるだけで行くことが可能である（図2）。

2-2) 調査方法概要

調査は、ヒアリングとアンケートにより行った。下関市唐戸町・南部町の住民および唐戸商店街店舗経営者を対象にアンケートを行った。また、下関市役所観光政策課の方にヒアリング調査を行った。

住民用アンケートは配布枚数516枚、回収数は68枚、回収率は約13%である。マンション所有者に許可をいただき、ポストに投函して配布、マンションエントランスに回収ボックスを置き、回答済みアンケートを投入していただいた。店舗用アンケートは配布枚数24枚、回収数は23枚、回収率は約96%である。直接経営者に配布

し、後日直接回収に伺った。

3. 地域住民及び店舗経営者の居住地域に対する認識

3-1) 住民アンケート回答者の属性

3-1-1) 年代・性別割合

アンケート回答者の属性を見ると、女性の割合が高く、年齢は女性の50%以上、男性の80%以上を60代が占めた（表1）。

3-1-2) 居住年数

アンケート回答者の居住年数は図4の通りであった。居住年数は半年～70年以上と幅広い結果となった（表2）。

表1 アンケート回答者年齢

	男性	女性
～30代	1	4
40代	1	9
50代	2	6
60代	11	12
70代～	11	11
合計	26	42

表2 居住年数

居住年数	人数
5年未満	11
5年以上	11
10年以上	13
20年以上	9
30年以上	12
40年以上	3
50年以上	5
60年以上	4

2001年より下関港唐戸地区では、海響館オープンに端を発したハード観光開発がスタートした。そのため、住民の居住開始年次を2001年以前または2001年以降の2パターンに分けた。2001年以前から居住を開始していた人は全体の51%、2001年以降に開始した人は49%であった。アンケート回答者では、約半数ずつに分かれたが、町ごとに見ると唐戸町では2001年以前に住み始めた住民がほとんどだったのに対し、南部町では2001年以降に住み始めた住民が多くみられた。南部町は唐戸町に比べ新しいマンションが目立ったことから、新しく住み始めた住民が多いと推測される。

3-2) 住民の地域に対する認識

3-2-1) 唐戸地区に居住して感じる事

「唐戸地区に住んでいて感じる事」のアンケート項目の結果は図3のとおりである。

「活気がない」と答える人の割合が全体の50%弱見られ、2001年以降・以前を比較してみてもどちらとも高い割合を示している。海辺の観光地自体は平日でも賑わいを見せていたが、ほど近い住宅地の住民は、自分たちの地域には活気がないと感じているようである。

「住み続けたい」と感じる人の割合は60%を超えていた。居住開始年が2001年以降・以前を比較しても高い割合を示している。市役所や病院、商店や市場などが近くにあり生活には困らないとの声があった。

2001年以降・以前を比較して大きな差が出たのは「愛着がある」、「不便に思う」の項目である。2001年以前の住民では、4割以上が「愛着がある」と回答しているが、2001年以降の住民では2割未満である。居住年数の長い住民の方が、地域に対する思い入れが強い。また、「不便に思う」と回答したのは、2001年以前では5%未満であるが、2001年以降では約30%いる。

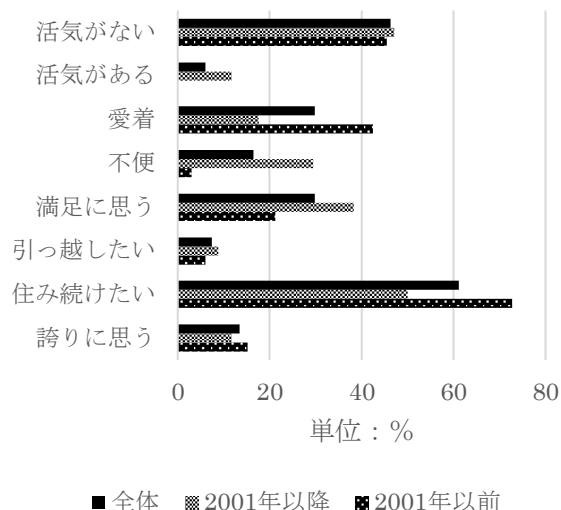


図3 唐戸地区周辺に居住して感じる事

3-2-2) 観光地という認識はあるか

自分の住んでいる地域が観光地であるという認識はあるかという質問に対し、多くの住民が「観光地に住んでいる」と認識している(図4)。特にないと回答した人の割合も、2001年以降・以前を比べてもあまり差はないことから、居住年次はほぼ関係なく、住民が観光地という認識をもって地域に居住しているとわかった。

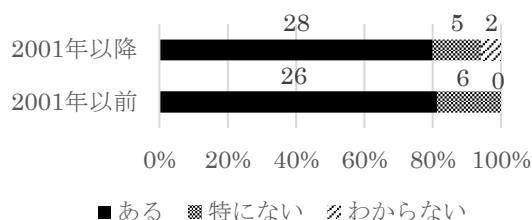


図4 居住地域が観光地という認識

3-3) 店舗経営者の属性

性別比は男女ともに半々であった。年齢構成比としては、住民と同じように、60代以上が多くを占める結果となったが、30, 40代の若い世代も多くみられた(表3)。経営年数も、半分が50年以上と、唐戸商店街創立当初からの店が多くみられる結果となった(表4)。店のカテゴリー別の軒数は表5に示した。

表3 店舗経営者年齢

	男性	女性
～30代	1	1
40代	4	2
50代	0	1
60代	3	5
70代～	3	2

表4 店舗経営年数

経営年数	軒数
5年未満	1
5年以上	2
10年以上	2
20年以上	2
30年以上	3
40年以上	1
50年以上	4
60年以上	7

表5 店のカテゴリー別軒数

店種	軒数
飲食店	7
食品販売	4
日用雑貨	7
美容室	2
ギャラリーカフェ	2

3-4) 店舗経営者の地域に対する印象

店舗経営者による唐戸地域(主に唐戸商店街)に対する印象では、「よくない」と回答した人が

多くを占めた。これは2001年以前から営業している店舗、以降から営業している店舗でも変わらなかった。主な意見としては、「活気がない」「人通りが少ない」「努力がみられない」「空き店舗が多い」などであった(図5)。

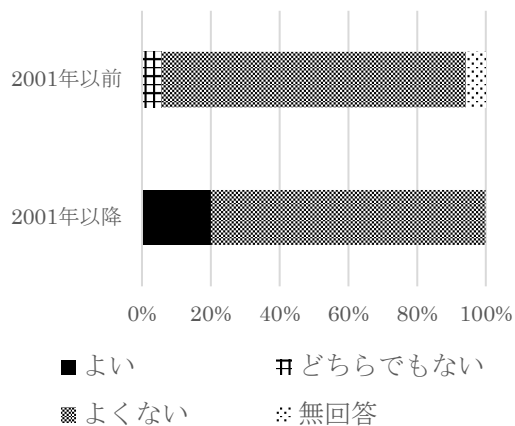


図5 店舗経営者の地域に対する印象

「活気がない」ことに関して、原因は何だと思おうかというヒアリングを店舗経営者に行うと、主な回答は「高齢化」であった。「観光地開発が始まる前から商店街の衰退は始まっていた」との回答が多く、観光地開発が始まってから客が減った・衰退したと考えている店舗経営者はほぼいなかった。

空き店舗の多さに言及する店舗経営者へヒアリングを行うと、「店を新しい業者に貸すという手もあるのに、安く貸したくないという人や、2階や奥は自らの居住スペースになっているので人に貸すのに抵抗がある人が多い」との回答を得た。

4. 観光地化する地域についての住民の認識とかわり

4-1) 地域の観光施設についての認識とその影響

4-1-1) 観光施設の住民への影響

観光施設が建設される前の段階で、地域にどんな影響が出ると予想したかを調査した結果、良い影響を予想したと答える人が60%を超えた(図6)。主な予想した良い影響として挙げたの

は、「にぎやかになる」「観光客が増えると思った」との声があった。また悪い予想として主な意見は、「観光客が増えてうるさくなる」「交通量が増える」などであった。

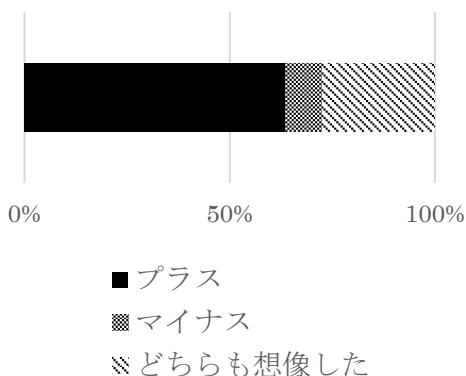


図6 施設建設についてのイメージ

実際に観光施設が建設されてから感じた影響では、1位「地域が賑やかになる」、2位「交通量が増加する」、3位「経済効果がある」、4位「景観の向上」、5位「道路・施設の充実」と住民にとってプラスのよい影響が上位を占めた。観光施設ができる以前とできた後を比較した意見を抽出するため、2001年以前からの住民・以降の住民で分けて集計を行った(図7)。その結果、2001年以前からの住民が一番感じている影響は、「交通量の増加」であった。2位は「地域の知名度の上昇」、3位が「地域が賑やかになる」であった。海岸線に観光施設ができたことで住宅街に駐車場ができ、土日は駐車場を探し回る観光客の車で道路があふれ、渋滞も見られるという。駐車場の整備はいくらかされたものの、道路幅などは整備されていないように感じた。また、「地域の知名度の上昇」をテレビで海岸線の観光施設が取り上げられているのを見て感じるというヒアリングでの意見もあった。

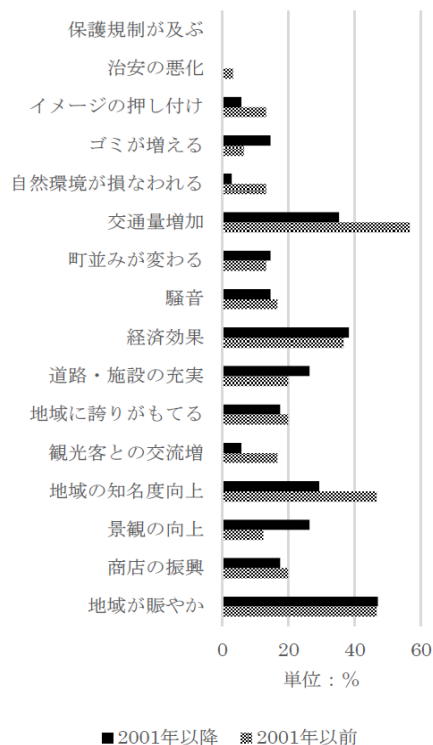


図7 観光施設があることで住民が感じている影響

4-1-2) 住民による観光施設の利用状況

住民の施設の利用状況は、使用したことのある住民がほとんどであった(図8)。とくに利用頻度の高い施設は「唐戸市場」で、週に1回、月に1回という意見が多く、魚を購入する目的の人が多かった。また、海岸線の施設の前に設けられたウッドデッキのウォーキングコースを

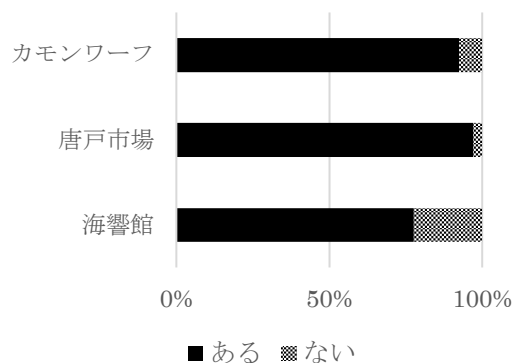


図8 住民の施設利用有無

散歩に利用している人が多く、観光施設が観光客のもののみならず、住民の普段の生活にも利

用されていることが分かった。

4-1-3) 住民の観光施設への評価

施設への住民の評価としては、カモンワーフ、唐戸市場ではネガティブな評価がポジティブな評価を上回る結果となった（図 9）。2001 年以前の住民と以降の住民を比べても、意見の割合に大きな差は見られなかった。主な意見は表 6 のとおりである。

ポジティブな印象を持つ人には、観光地らしいにぎやかさや、自身も利用して楽しんだ経験を述べる人が多かった。ネガティブな印象を持つ人には、施設を利用する際や何かを購入する際の値段の高さや、施設への物足りなさを述べる人が多かった。

表 6 施設に対する感想

海響館	ポジティブ	特色がある，雨天でも楽しめる，イルミネーションが綺麗，観光客が増えたと思う，イベントも工夫されていてよい
	ネガティブ	観光客が多すぎる，駐車場が少ない，入場料が高い，家まで悪臭がくる，一度行けばよい
唐戸市場	ポジティブ	魚が新鮮，観光客が多くにぎやか，魚を買えてよい，おいしい
	ネガティブ	暗い，不衛生，値段が高すぎる，古い時の方がよい，観光客のためという感じが強い
カモンワーフ	ポジティブ	観光地に行っている気分になる，選択肢が多い，土産物を買える，散歩に良い
	ネガティブ	営業時間が短い，高い，目新しいものがない，チェーン店ばかり，ものたりない，通路が狭い

5. 商店街と観光施設のかかわり

5-1) 観光地化の影響

観光地化したことで変化や影響を感じるか唐

戸商店街の店舗経営者を対象に調査をした。ほとんどの店舗が「特に影響はない」と回答しており、「そもそも観光地向けではなく、地域住民の生活用の商店街だから集客は望んでいない」との意見もあった。「マイナスの影響を感じる」との意見の中には、「二極化が進んだ」、「前はお昼を食べに来る客もいたが、海岸線にお店がた

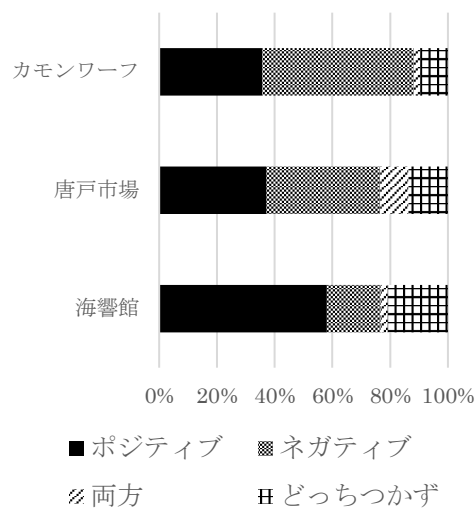


図 9 各施設のイメージ

ってからはこちらに来る理由がなくなった」、「住民が海浴いで買い物をするようになった」との声があった。飲食店と酒屋の 2 店舗のみ「プラスの影響がある」と回答しており、「観光客が増えた」と記述していた。

5-2) 観光施設とのかかわり

海浴いの観光地とのかかわりとして、タイアップ企画を行ったことのある店舗は 22 店舗中 12 店舗であった。2001 年以前の店舗に企画を行った店舗が少ないのは、日用品を取り扱った店舗が多く、観光客が集客対象にならなかったことが予想される。主なタイアップ企画としては、唐戸春・秋祭り、朝市などがあった。観光地とのかかわりを感じるか、という質問においては、「あまりない」「分断されている」がほとんどを占めた。タイアップ企画や、観光客のながれが多少あると認識していても、活気の差など、「国道を挟んで別世界」との声が多かった。

6. 考察

6-1) 新たな観光施設の地域住民への影響

下関唐戸地区に観光施設が建設されたことは、住民にどんな影響を及ぼしたのだろうか。

施設建設については住民の多くがプラスの影響を予測したことから、観光施設は住民にとっても期待されていたものだと考えられる。建設後、住民が感じている影響としては、「地域が賑やかになった」というものが多かったが、現在の地域に対する印象として、「活気がない」と答える者も多い。このことから、あくまでにぎやかになったのは観光地である海側のみで、自身の居住する地域までにぎやかになったとは感じないと住民の多くが認識していると考えられる。次に住民の多くが感じている影響は、観光客の駐車場不足による交通量の増加であった。観光地開発以前より住んでいる住民にとって特にこの影響は強く認識されている。先ほどのように海側だけではなく、自身の居住地まで及んでいる影響であり、住民の中でネガティブにとらえられていた。観光施設は、住民も多くが利用しており、散歩や買い物など、普段の生活においても活用している。以上のことから、住民に及ぼす影響としては、①施設を利用するなどの住民の生活における変化、②交通量の増加による観光客の居住地への流入、があると言える。

6-2) 地域住民による観光施設の評価

住民の観光施設への印象は、海響館ではポジティブなものが多かったが、飲食物を取り扱う唐戸市場、カモンワーフではネガティブなものが多い結果となった。唐戸市場、カモンワーフでは、「値段が高い」とする声が多く、観光客向けの値段設定で、住民向けではないことが住民の評価を下げている。

6-3) 商店街と観光施設

唐戸商店街は、開発された観光地とリンクした経済活動が考えられるが、唐戸商店街は周辺住民が日用品を買うための場であり、その本質は海沿いでの観光地化が進んでも変わることはなかった。また、観光地化とは逆に衰退してい

るとの声が多かったが、衰退の理由を尋ねると、「観光地ができる前から高齢化で」との声を多く聞いたことから、観光地と唐戸商店街はあまり相互に関与していないことが分かった。

7. まとめ

以上のことから、周辺地域には以下のような影響がみられたことが分かった。①住民が積極的に施設を利用することによる、経済活動としての地域住民の観光地への流入、②観光客の駐車場探しとしての観光客の地域住民居住地への流入である。

謝辞

本研究を行うにあたり、は下関市役所の方、唐戸地区住民の皆さま、唐戸商店街の皆さまに調査にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。まことにありがとうございました。

引用文献

- 折田仁典・鷺谷斉・清水浩志郎（1998）：過疎地域の観光開発に関する基礎的研究，15，253－258
- 須藤廣（2007）：地域の観光化に対する住民の意識，関門地域研究，16，145－159
- 高田誠マルセル・大西隆（2010）：観光開発による創作的景観の形成過程と地域住民評価に関する研究 中国上海市金山区中洪村における農民画を題材として観光開発を事例として，日本建築学会計画系論文集，75（652），1433-1439
- 西嶋啓一郎，仲間浩一（2000）：関門海峡地域において成立した風景の構造に関する史的考察，ランドスケープ研究，64（5），713－718
- 国土交通省九州地方整備局下関市 http://www.pa.qsr.mlit.go.jp/shimonoseki/s_himoko_shokai.html#zoning（最終閲覧日 2018.2.15）

総務省統計局 HP

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/>
(最終閲覧日 2018.3.12)

海響館 HP

www.kaikyokan.com/(最終閲覧日 2018.2.15)

カモンワーフ HP

<http://kamonwharf.com/> (最終閲覧日
2018.2.15)

唐戸市場 HP

www.karatoichiba.com/ (最終閲覧日
2018.2.15)

Welcome to KARATO SHOTENGAI

<http://www.karato.info/> (最終閲覧日
2018.2.15)